

幸田露伴『風流佛』の言語道断⁽¹⁾

金 沢 篤

が、露伴の名をして一躍藝壇の王座を争ふまでに重からしめたのは『風流佛』であつた。『露團々』は露伴の作才の侮り難いのを認めしめたが、奇想天来の意表外の構作が読者を煙に巻いて迷眩酔倒せしめたので、私の如きも讀まない前に美妙や學海翁から散々褒めちぎつて聴かされてゐた爲かして、讀んだ時は面白さに浮れて夢中となつたが、其の面白味は手品を見るやうな感興で胸に響くものは無かつた。が『風流佛』を讀んだ時は讀終わつて暫くは恍然として、珠雲と一緒に五色の雲の中に漂うてゐるやうな心地がした。アレほど我を忘れて夢幻に徜徉するやうな心地したのは其後に無い。短篇ではあるが、世界の大文學に入れるべきものだ。(内田魯庵⁽²⁾)

はじめに：ある思い出

幸田露伴については、いつか何か書いてやろうと考えていた。お金はなかったけれど時間だけは掃いて捨てるほどあると感じていた頃のこと。古本屋の店頭から安い文庫本などを買ひ込んで手当たり次第に読みあさっていた時代、たとえば幸田露伴の小説などを讀んで、西欧の外国語よりも何よりも、漢語のやまほど詰まった日本語の文章をこんな風に華麗にかつ自在に操れるようになりたいと思ったものだ。幼少の頃よりいわゆる漢籍や日本の古典を讀んで教養を培った近代日本の文豪たちの中でも、露伴は圧倒的に輝いた存在だった。貧しかったのでたくさん所有するためには文庫本しかなかったが、これはという人については、やはり個人全集を身近に揃えておきたいと考えていた。全集は値段も高く、思うように買えるものではなかったが、読まずとも部屋の中にそれがあるというだけで、なにか豊かな心持ちがして、そういう人たちに一歩だけでも近づけたというたわいない気持ちになれた。岩波から『露伴全集』（新版：第二刷）の刊行が開始された時、迷ったが思い切って買うことにした。そ

れだけならさほどの負担でもなかっただろうが、何せ好奇心旺盛な生意気盛りの頃だから、相当の覚悟がいったと思う。確か一ヶ月一冊の配本だったろうから、全42巻のそれが完結するまでに何年もかかったはず。途中で止めてしまうことも出来たが、現在いちおう揃った形であるのだから、がんばり通したものと思う。露伴の主要な小説作品はたいがい文庫本で読んでいたから、買った全集はほとんど手つかず状態と言えた。そして時は流れ、その全集はどうしたわけか、今は大学の研究室の書棚に収められている。とはいえ、その書架の前には、大きな段ボール箱がいくつも積まれていたりするから、研究室を訪れる人がいても眼に触れることはない。そして確かに長い長い時間が流れたのだった。

幸田露伴に時間を費やすなど夢のまた夢のような仕儀に立ち至っていたところ、近代日本の知的巨人、南方熊楠と幸田露伴の二人をやけに持ち上げる一人の同僚との行きがかりで、自分の幸田露伴についての思い出を思わず口にしてしまった。大昔、露伴の小説を読んだところ、「言語同断」という言葉遣いに遭遇して、「露伴の仏教の素養もたいしたものではない」と思ったことがある、と。日頃何事に対しても驚いたりしないその同僚は、さりげなく「どの作品かな、あの時代の作家は校正などろくにしなかったから、単なる誤植か無教養な編集者のせいなのでは」と言った。それを聞いて、はっと思ったのが、本稿執筆の直接のきっかけだった。露伴の数ある小説の筋もうろ覚え、自分が「言語同断」と出遭ったのは事実だとしても、何という作品だったかも言えなかった。

「言語同断」の用例を調べてみようと思った。小説作品であることは確かだったから、直ちにその作業に着手。文庫本は文字通り秘蔵本で、日常的に使わないものは、段ボール箱に詰め込んで押し入れの中などへ、簡単には取り出せない。したがって、ただ埃をかぶって研究室に隠棲していた『露伴全集』、その最初の10巻が小説作品だから、第1巻から片っ端からあたってゆくことにした。「言語道断／言語同断」さがしというまさしく機械的な作業である。パソコン時代、いやインターネット時代の今日だから、電子版の「露伴全集」でもさがした方が効率的かとも思わぬわけではなかったが、ままよ、十冊くらいならあつという間さ、とせっかちなアナログ的作業を実行した。結局、研究室にいる空き時間をせっせと有効利用して数日のうちに「言語道断／言語同断」の用例さがしを終えることとなった、めでたし。だが、大昔自分が「言語同断」の用例に出遭って、露伴を「仏教の教養なし」と決めつけることになった作品を特定

することは出来なかった。そしてそのデータを基礎に、さらに幾ばくかの作業を重ねることによって、幸田露伴にとって「言語道断」は無教養の結果なのか、出版刊行に先立つ過程での不本意な「誤植」の類いなのかを論究することとなった。また、露伴の仏教の素養を十二分に伺わせる最初期の傑作と評価される「風流佛」にもその「言語道断／言語同断」が現れることから、近代日本の正真正銘の古典作品としての「風流佛」の〈本文批評〉をも併せ遂行することとなった。

結果的には昨年度身のほど知らずに発表した金沢 [2012]、「正宗白鳥の夢（1）—「ダンテについて」の本文批評を中心に—」の文字通りの続編と言うべきものである。

I. 幸田露伴と言語道断

幸田露伴とは誰か。それに対しては、本間久雄 [1937] の次の一節を引いておこう。

「露伴名は成行、蝸牛庵又は脱天子などゝも號す。父は成延、幕臣であつた。夙くから漢書佛書、さては徳川期の戯作文學を耽讀し、博覽強記を以て稱せられてゐた。一時電信技師として北海道に赴いたこともあつたが、明治廿年歸京。その奇抜な着想と才筆とを認められた最初の作は、廿二年二月の「都の花」九號から同八月の廿號迄連載した『露團々』（廿三年單行公刊）であり、更に翌廿三年九月⁽³⁾に「新著百種」第五篇として公けにした『風流佛』は彼れをして一躍紅葉と並んで文壇の寵兒たらしめ、次いで『對髑髏』（廿二年）、『奇男兒』（廿二年）、『一口劍』（廿三年）、『辻淨瑠璃』（廿四年）、『寢耳鐵砲』（同上）、『いさなとり』（同上）を経て、明治廿五年、『五重塔』を出すに及び、彼れの名一代に喧傳されるやうになつた。」(220頁)

また批評家としても名高い正宗白鳥は、「昭和三年二月」、幸田露伴について以下のように記している。当時の自分の思いを美しく代弁してくれている批評文としてわたしは愛読している。

「逍鷗紅露とおのゝの頭文字が熟語となつて、明治文壇の大家が定まつた時分から、私は露伴氏の作品をも、目に觸れたものは、大抵讀んでみたのであつたが、氏のものに限つて、殆んど何等の興味をも覺えなかつた。紅葉の作品は何と云つても面白かつた。「紅葉は文章は巧いが内容が乏しい。露伴は想が傑

れてゐる」などゝ、あの頃の文學青年は云つてゐたものだ。露伴の方が非凡らしく云はれてゐた。世評がさうだから私もさう思はせられてゐたが、その非凡さを自分の頭脳に感得したことはなかつた。あの頃のもろゝゝな作家のうちで、露伴氏は巨木のやうであり、英雄のやうであり、他に異つたえらさがありさうに思はれてゐたが、しかし、私は何となくさう思つてゐただけで、直接に氏の作品によつて感動さゝれたことはなかつた。氏は早くから和漢の文學に造詣深く、文章が六ヶしく凝つてはゐたが、しかし、少年時代の私が讀み悩むほど、氏の小説が難解の書であるとは思はれなかつた。」（正宗 [1951] (一) 142頁）

小田切秀雄 [1973] の以下の一節は、文學史上の幸田露伴を浮き彫りにするものであろう。

「しかし、露伴のこうした意慾の活気は、明治社会の現実の矛盾や重圧を受けとめてこれを現実的に分析し、批判し、破壊し、打開してゆく性質のものではなく、絶対主義秩序に批判的に対立する思想性や疑惑やをひそめたものでもなかつた。かれの主人公の多くが近代前的な職人や技芸者やであり、その芸術への打ちこみ方も古風な職人的、名人氣質的なものとして現われていたのは、以上のことと関係している

このことは、明治の開花にとりのこされた民衆のなかにひそめられていた人間的な情熱や意慾やの、独自の形態に触れたものとして注目にあたいする側面をもちながらも、近代的な人間性の自覚や要求とはまだ直接に結びつきえない性質のものであり、露伴の作品と近代文学とのずれもそのことと結びついていた。かれの作品が強烈に提示した“理想”が、近代文学の基本的な發展のための“哲理”となることができず、透谷によって“一種の”哲理とされ、さらにその透谷によってのちに、露伴の理想派としての“理想”が近代的な“内部生命”の要求と離れていることを批判されざるをえなかつたゆえんである（透谷の明治二六年五月『内部生命論』。）（214-215頁）

さて、幸田露伴の「言語道断」に関わる今回の論攷に着手してしばらくしてから、ほとんど偶然のようにして、「言語道断」考」という論攷、鈴木丹士郎 [2007] の存在することを知った。「言語道断」を標題に掲げ、真つ向からそれを論ずる論攷があることに驚愕するとともに、その論攷の中で、幸田露伴の用例までもが言及されていることを知って、さらに驚愕した。その上、鈴木

丹士郎氏によって、「言語同断」について言及する一冊の岩波新書、山田俊雄 [1991] のあることを教えられ⁽⁴⁾、「やや、してやられた」という気持ちにもなった。だが考えてみれば、日本語の言葉の使用法をめぐるそうした国語学的、言語学的アプローチは決して特別なものでなく、露伴の小説を読む若者がめっきり減った現在とはいえ、わたしが気づくようなものであるから、読書中に誰が気づいて論じてもし少しも不思議なことではないと思うことにした。

鈴木氏に導かれるままに山田俊雄 [1991] を購入して問題の箇所を読み、なるほどと感心した。最後の「V 辞書の周辺」の冒頭が、「言語同断」。以下のように始まっている。

「今、標題に「言語同断」と書いたが、おそらくこの文章を読むに当って、どんな人でも、これは誤りだと気が付かれることと思われる。

「言語同断」ではなく、「言語道断」でなければならないことを知っていて、標題に掲げたのは、ちょっと申したいことがあつての悪戯であると、御容赦を乞うておく。」(200頁)

博覧強記の幸田露伴にとっても「言語同断」は大いにあり得る。「言語同断」は必ずしも第三者による誤植と断ずる必要はない、逆にむしろ「言語同断」は書き手の「好み」であったり、ある種の教養の証である。あの滝沢馬琴にも「言語同断」の使用例が一例ならずあったとの事実や、そのことを踏まえての鈴木丹士郎氏の「江戸時代後期の節用集に「言語同断」の書き方の見られることはすでに山田俊雄氏に指摘がある。・・・<中略>・・・「言語同断」を登載する節用集の類が世に行われるようになると、この語の漢字表記に影響を与えないはずがなく、従来からの伝統的な「言語道断」のほかに「言語同断」と書くことが当然あったと考えるのが自然であろう。」(20頁)のような指摘に、わたしも大いに啓発されたのである。鈴木氏は、幸田露伴に関しては、その若干の用例を踏まえて、以下のように言及している。

「幸田露伴の『いさなとり』(明治二五年刊)に「言語同断」は散見するが、『風流仏』(明治二二年刊)には、

大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、当世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて押へて何者の仕業ぞ、酷らしき縄からげ(五上)

のように「言語道断」とあり、露伴は「言語同断」の方の使用を好んだともい

えないようである。」(21-22頁)

だが、鈴木氏は、幸田露伴の「いさなとり」の方はともかくとして、「風流佛」を、いったいどの版、どの刊本で読んだのだろうか。「明治二二年刊」とあるだけで、確か、それについての記載がない。鈴木氏の指摘は、結局、「いさなとり」では「言語同断」とあったものが、「風流佛」では「言語道断」とある、に止まるものであろう。わたしの見るところ、鈴木氏は、わたしが今回の調査のベースにした「露伴全集」(新版)第1巻所収のテキストを用いているようである。後に言及することになるが、わたしは、その「露伴全集」(新版)第1巻所収「風流佛」の編集方針が必ずしも適正なものではない、むしろ「言語道断」であると指摘したいと思うのである。以下に引くところからも明らかにように、「風流佛」にただ一カ所現れる「言語道断」は、その初出にあつては「言語道断」ではなく、「いさなとり」同様、「言語同断」とあるのである。

◎「風流佛」(1889)

○「⁽⁵⁾さては邪見な七藏め、何事したるかど彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か[言語道断]、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」(岩新全1、41頁)第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるかど彼此さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、[言語同断]、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪今や消入らん計り、・・・」(『風流佛』<初出>35-36頁)(『妹背貝・風流佛』136-137頁)(岩新日182頁)第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、[言語道断]、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、

元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。」（『はるさめ集』76頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（『風流佛』東京堂31頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（岩波文庫、23-24頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（岩波全1、45-46頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼是さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の毛の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（『風流佛』天祐社、35-36頁）（春陽堂、332頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼是さがして大きな節の

抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のは長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（改造社、9頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷たらしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のは長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（春陽堂文庫101頁）第5上

○「さては邪見な七藏め、何事したるかと彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のは長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（集英、17頁）第5上

○「・・・さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼方此方さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語道断、當世の摩利夫人与さへ此の珠運が貴く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷たらしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のは長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（『風流艶魔傳 他五篇』角川文庫20頁）第5上

○「さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、當世の摩利夫人与さへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷たらしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪のは長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」（『風流佛・艶魔傳』

角川文庫 20頁) 第 5 上

○「さては邪見な七藏め、何事したるかと彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷たらしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」(『風流佛・對髑髏』新潮文庫 22頁) 第 5 上

○「さては邪見な七藏め、何事したるかと彼此さがして、大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。・・・」(講談社、11頁)(筑定、25頁)(角川、52頁)(筑明、9頁) 第 5 上

◎「和合樂」(1890)

「・・・夫程の孝子のわたしに尚々愚癡と恨みと水ッ鼻涕と三色調合した異見を頭からあびせ掛るおふくろなどは、實にハヤ言語同断の雌だ、女は罪が深いとは此處の道理だろう。」(岩新全 1、182)(叢書前、331-332頁)

◎「雪紛々」(1889)

「何故にアイヌは同じ人間でありながら文字を習ひ學問を爲す事のならぬか、言語に絶て不道理無慈悲の憎き制禁、・・・」(岩新全 7、177頁) 第 9 回

◎「風流微塵藏きくの濱松」

「・・・玉山様の賢いんは何共云はう言葉が無い、・・・」(岩新全 8、119頁) 其五

◎「奇男兒」(1889)

「・・・言語道断最早堪忍なり難し。・・・」(岩旧全 1、88頁)(改造、51頁)(春陽、390頁) 第一

「・・・言語同断最早堪忍なり難し。・・・」（岩新全 5、4 頁）（葉末、67 頁）（『一口劍・ひげ男』新潮文庫 7 頁）第一

「・・・言語に絶たる一生の大不覺ではないか、・・・」（『一口劍・ひげ男』新潮文庫 19 頁）第五

◎「冷干氷」（1890）

「・・・「祕密の價値を奪ふ」道理を應用したる、ずるいこと 言語同断なり。・・・」（岩新全 1、250 頁）第 10

「・・・「祕密の價値を奪ふ」道理を應用したるは、流石ずるいこと 言語同断なり。・・・」（叢書後、309 頁）第 10

◎「聖天様」（1891）

「それつらゝゝ面を洗つて見渡すに、ノアの時の洪水退たとあるは 言語同断、怪しからぬ聖書の誤傳、實は現今も世間一體に水漬、・・・」（岩新全 2、4 頁）

「それつらゝゝ面を洗つて見渡すに、ノアの時の洪水退たとあるは 言語同断怪しからぬ聖書の誤傳、實は現今も世間一體に水漬、・・・」（『風流佛』東京堂、150 頁）

◎「當世外道の面」（1891）

「・・・彼壺口の女めが好きゝうなり彼今日聘ばれたる踊りの師匠の腰付どうも云はれぬところあり小膀の切れ上つたとは彼様いふ者のことかなど 言語同断の評ばかり爲て居るなるべし。」（岩新全 2、111 頁）（叢書後、125 頁）8

「・・・三千世界に再あるまじき眞實男と大切にかけてべきを 言語同断、何か付込るべき弱點の男にあればとて詰らぬ言争ひから悪口雑言の末は大それた腕力沙汰、・・・」（岩新全 2、122 頁）（叢書後、138 頁）12

◎「新浦島」（1895）

「・・・本土に歸らしめんといふに、卻つて我が慈悲の言葉を空とし此處に止まり居たき願ひを同須に逼りたてたる由、不埒不屈不覺悟千萬、言語同断とはおもへども聞かねば仔細更に分らず、無禮は免す遠慮は入らぬ、思ふ通りを包まず云ふて我に聞かせよと命ずれば、・・・」（岩新全 2、264 頁）（叢書後、498 頁）（岩旧全 1、927 頁）其 19

「不埒不届不覺悟千萬、言語道断とは」（講談113頁）（岩新日476頁）＜註：言語道断のあて字。もつてのほかである。＞（『二日物語・風流佛』岩波文庫 96頁）（『風流艶魔傳』角川文庫136頁）其19

◎「不藏庵物語」（1905）

「・・・自分は如何程辛くても忍ばなければならぬと、じつと耐へて居るやうな女は處々の家庭に在つたもので、今から云へば實に氣の毒にもまた慙然な、言語道断の次第で有つたのです。」（岩新全4、36頁）（春陽、491頁）（『愛の小説集』80頁）其十二

◎「めぐりあひ」（1898）

「・・・縦ひ不義私通の實蹟なきまでも自己が一存にて某男を夫とせんなど思ひ詰め居るといふこと、言語道断不埒の女、・・・」（岩新全3、193頁）其1
 「・・・縦ひ不義私通の實蹟なきまでも自己が一存にて某男を夫とせんなど思ひ詰め居るといふこと、言語道断、不埒の女、・・・」（初出『夏期附録 反省雑誌』第13年第8號：明治31年8月1日發行6頁）其1

◎「付焼刃」（1905）

「・・・夫に言葉を返すなんぞといふのは言語道断だ。・・・」（岩新全4、190頁）（『玉かつら』140頁）（改造281頁）其3
 「・・・夫に言葉を返すなんぞといふのは言語道断だ。・・・」（『太郎坊他三篇』岩波文庫87頁）其3

◎「寝耳鐵砲」（1891）

「・・・其やうに甘い根性の汝が教育たる故あのやうな不届、告ずして走る淫行しての今を尚庇護ふとは言語道断、お柳といふ名を聞くさへ親を辱しめ家風を墮せし奴と腹が沸てならぬ、・・・」（岩旧全1、441頁）第29
 「・・・其やうに甘い根性の汝が教育たる故あのやうな不届、告ずして走る淫行しての今を尚庇護ふとは言語道断、お柳といふ名を聞くさへ親を辱しめ家風を墮せし奴と腹が沸てならぬ、・・・」（岩新全5、169頁）第29
 「・・・其やうに甘い根性の汝が教育たる故、あのやうな不届、告ずして走る淫行しての今を尚庇護ふとは言語道断、・・・」（改造120頁）

◎「いさなとり」（1891）①

「・・・書と云ふ者は難有いもので何でも読みさへすれば分るが不思議、その書を読むことを廢めさずとは[言語同断]、汝も文盲ではないか、文盲の癖に娘の學問を妨ぐるとは怪しからぬ、染や縫針などは知らいでもよい、・・・」（岩旧全1、461頁）（岩新全7、341頁）（岩波文庫7頁）第2

「廢めさずとは[言語同断]、」（角川91頁）〈註：もつてのほか〉（筑明55頁）（筑定123頁）

◎「いさなとり」（1891）②

「・・・大切のお俊さまを疵物にして置いて汝は去らむとは[言語同断]、これほど了らぬ馬鹿では無かりしがと散々に・・・」（岩旧全1、550頁）第40

「・・・大切のお俊さまを疵物にして置いて汝は去らむとは[言語同断]、これほど了らぬ馬鹿では無かりしが、・・・」（岩新全7、431頁）（岩波文庫96頁）第40

「去らむとは[言語同断]、」（筑定155頁）（筑明89頁）（角川169頁）

◎「いさなとり」（1891）③

「腐れ合ひのそもゝを問へば[言語同断]、お新といふ女は元來左程の悪人ではなけれど氣の弱い者の常とて悪事は必ず爲ぬと我が意を張り通すことの出来るほど潔白なものにもあらず、・・・」（岩旧全1、633頁）第79

「腐れ合ひのそもゝを問へば[言語同断]、お新といふ女は元來左程の悪人ではなけれど氣の弱い者の常とて、悪事は必ず爲ぬと我が意を張り通すことの出来るほど潔白なものにもあらず、・・・」（岩新全7、515頁）（岩波文庫178頁）第79

◎「弓矢の家」（1897）

「・・・的も定め得いでへろへろ矢を酔漢の唾液吐くやうに放ち散らす、[言語に断へたる]不埒な奴め、汝のやうなる癡漢の武士にあるべき筈は無し、・・・」（岩新全10、102頁）其二

いかが。以上が、岩波の『露伴全集』（新版：第二刷）、すなわち岩新全の第1巻から第10巻の小説編に対して今回わたしが調査を敢行した「言語同断／言語道断」の全用例に基づく諸刊本の異同である。用例として多いのか少ないのか。結局幸田露伴の「言語道断」と「言語同断」の用い方に関して以下の四つ

の選択肢によって論じ得るように思われる。

- (1) 露伴は、常に「言語道断」と用いる
- (2) 露伴は、常に「言語同断」と用いる
- (3) 露伴は、「言語道断」と「言語同断」で明確に使い分けている
- (4) 露伴は、「言語道断」と「言語同断」の使用に関してルーズである

(1)か(2)かだと、どちらだろう。常識的には、(1)の場合は考えにくい。編集者や印刷業者が、露伴の原稿に「言語道断」とあるのに、うっかり「言語同断」にしてしまうことはあっても、それで統一してしまうことはありえない。「言語同断」の用例が多いからだ。逆に(2)の場合は、大いにあり得る。露伴は常に「言語同断」と書いているにもかかわらず、編集者ないし印刷屋が「言語道断」[が正しい書き方として、]適宜、そのように修正する。その結果が、露伴作品の初出時の「言語道断」と「言語同断」のあれこれの実状となっている。再録などに際して、その編集方針として、原著者の意向を尊重するか、初出を尊重するかの方針の如何が、露伴作品の「言語道断」と「言語同断」のあれこれの現状を生み出している。(3)の場合もあまり考えられない。その「言語道断」も「言語同断」も、歴史的、語源的にみると「言語道断」が由緒正しいというのが常識であるからだ。(4)の場合が、通常ならば大いにありそうだが、文学者として表現に常に意識的に厳格である露伴の場合には、少なくとも、絶対の大家として確立を得ていない、初期の場合には、やはりあまり考えにくいのではないか。こうして見てくると、やはり露伴の場合は、原則として、「言語道断」は「言語同断」として用いた可能性が一等強いように思われる。この「言語道断」は元、仏典の中で、「言語道断」と表記するのが常識であるとはいえ、かなり早い時期に世俗の言語表現の中に取り入れられて、必ずしも仏教本来の意味ではなく用いられるようになったという。そうした事情を考慮するならば、小説作品の中では、露伴はむしろ好んで「言語同断」と表記したと考えるのが理にかなっているのではないか、というのが、筆者の本稿でのいちおうの帰結である。したがって、後に露伴作品を再録するにあたって、初刊ないし初出に反して、「言語同断」を老婆心より「言語道断」と訂正するのは、必ずしも露伴の本意に沿ったものとは言えないのではないかと指摘したいのである。

II. 幸田露伴の『風流佛』

幸田露伴の初期の傑作と言われる『風流佛』は、有名な解説者、鹽谷贊が、

「風流佛」一篇は、発表のときには「縁起」がついてゐるがこれは戯作的な調子のもので後には省かれ、現行のかたちには「如是我聞」といふ発端の一章、本文は法華経方便品の十如是の名を配した十章で、「諸法実相」の團圓の一章を以て終はる。」（『風流佛・艶魔傳』101頁）と言う如く、幸田露伴の仏教の素養を伺うにも格好の資料と言える。その「風流佛」が、吉岡書籍店より刊行されたのが、明治22年9月のことであるから、露伴、若干22歳の時である。作品名は言うまでもなく、紙面に氾濫している仏教色の濃厚な厳めしい漢語の数々、現代の若者ならずともすらすら読み通すことは、必ずしも容易ではない。それを一介のインド哲学の研究者が、敢えて論攷の俎上に取り上げようというのである。だが、なぜ幸田露伴の「風流佛」かと訊かれたなら、そこに問題の「言語同断／言語道断」の用例が見られ、それが初期の文句なしの傑作、初出が明確で、『法華経』とも深く関わりがあり、全篇仏教色の濃厚な夢幻的恋愛ドラマであるからとでも先ずは答えておこうか。

鹽谷贊氏は名作「五重塔」の岩波文庫（改訂版）の解説で次のように言っている。

「露伴の「五重塔」は新聞「國會」の明治二十四年十一月七日號から翌年三月十八日號まで三十一回連載して中絶したあと、「五重塔餘意」と題して再びその年の四月十二日號から載り、十九日號に三十五回を以て完結した、作者の數え年二十五歳から二十六歳へかけての作品で、「いさなとり」とともに初期の代表作とされるものである。現行本は明治二十五年十月青木高山堂發行の「尾花集」に收められたかたちをもととし、新全集版もそれに據っていて、初刊本以來の誤植と考えられる一字を訂正してある。「露伴全集月報」第十四號に、「………結末の句、『西より瞻れば飛檐或時素月を吐き』の飛檐は、初刊本『尾花集』以下の諸本には『飛椽（ひえん）』とあり、舊全集には『飛椽（ひてん）』と振假名を更へてゐるが、一代の傑作と稱せられる作品であるから一字一句もゆるがせにすべきではないので、椽は檐の誤植と断定し、こゝに『飛檐（ひえん）』と改めることとしたものである」というのがそれである。新聞に載ったときにはこの句は存しない。」（『五重塔』89頁）

露伴の「言語道断」「言語同断」の用例を「露伴全集」（新版）小説作品を中心に、検討して思うのだが、ここで鹽谷贊が名作「五重塔」に関して言うことにははっきりと異を唱えたい。テキスト批評の観点に立つならば、その作品が「名作」であろうが愚作・駄作であろうが、作品の出来不出来は誤植訂正

の妥当性とは一切関係ないと思われるからである。一度それが作家の手を離れて公開されたならば、もう勝手な改変は許されないと思うのである。問題にすべきは、公表されたものが、真に著者の意図を忠実に反映したものであったか、脱字・誤記・誤植はなかったかという問題である。あった場合には、それが著者自身の手によって可及的速やかに訂正されることが望ましいが、小説作品の場合は何とも難しい問題である。新聞や雑誌に公開された後、単行本に収録されたりして公刊される場合、また、全集などに収録される場合などが、その好機となる筈だが、なかなか、合理的には展開しないのである。したがって、著者本人の手を離れてテキストを確定する作業そのものの如何が常に問われることになる。そうした問題を、今回わたしは幸田露伴の初期の代表作と評価される「風流佛」（1889年初出）に関して検証したいと考えたのであった。それが、本節の内実を構成することになるが、わたしはできるだけ客観的にその作業を遂行すべく、限られた時間で可能な限りの「風流佛」の刊本を手元を集めることからスタートした。名作に相応しい点数である。刊本の総てを参照したとは到底言えないが、それでも九割方は集め得たのではないかと考えている。本稿をまとめる段階では、合計22本である⁽⁶⁾。サンسكريット文献学風に言うならば、わたしが今手にしているのは、130年ほど前に初刊された古典的テキストに対する22種類の写本ということになる。そしてどれが著者とされる幸田露伴の意に最も適った写本であるかを審及する作業を展開しようというのである。文字通りの著者直筆の決定的な原稿が参照できない状況下での作業となるはずだが、しかたがない。

明治40年5月12日発行という奥付を持つ『はるさめ集』（東亜堂書房）の巻頭には以下の〈引文〉の印刷された赤い紙が一葉挿入されている。これはこの書物が、著者の幸田露伴自身によるものであることを意味しており、著者のこの時点での自身の作品に対する意向を反映したものと言える。

「引

春の雨しめやかに降る日、鼠穴にちらりと見えたる反古引き出して、つれづれなるまゝに読みもて行けば君の文なり、軒の玉水の音を聞き飽きては黴臭きかき餅をも取りおろして焼くならひなれば、蜂の巢傳ふ屋根の漏りのさびしき折などは、これらのものも心慰むよすがとなるべし、我に賜へ人にも示さんと東亜堂の主人のいふ。物みな古りてはよめが君にまゐらすべきものとおもへるを、など今更に君にをしまんやとて、かく。

露伴」

さて、『風流佛』の本文批評に関しては、何をおいても、東京堂刊行の刊本所収の山口剛による「風流佛本文異同」（167-170頁）であろう。山口は、そこにおいて、初出「風流佛」（新著百種本）とそれの著者幸田露伴による改訂版たる『はるさめ集』本の異同を記しているのである。幸田露伴研究の重要な成果であるにも拘わらず、参照され、言及されることが少ないのは、刊行者に〈本文批評〉に対する意識が希薄なことも関係しているのだろう。だが、それよりも何よりも、『はるさめ集』とその価値を喧伝することになった「東京堂刊行」本がレアであることに起因すると考えられるので、〈資料再録〉の意味もこめて、以下に若干の修正を加えた上で掲げておきたい。なお、改訂版たる『はるさめ集』本と初出版たる「新著百種本」の異同として記載されているが、改訂版の方は、その改訂版を踏襲している「東京堂刊行」本のロケーションが（頁・行）で指示されている。ただし校訂者の山口が参照しているのは製本される以前の不十分なグラ刷りであるようで、実際の刊本のロケーションと必ずしも一致していない。（）に入っていない数字は、筆者が実際の刊本に対応させたものである。（）数字が欠落している用例が二例あるが、それは山口の「風流佛本文異同」からは抜け落ちていたものの、筆者が本稿との関わりで特に重要と考えた両版の異同である。「風流佛」中、「言語同断・言語道断」はただ一例あるのみであるが、初出で「言語同断」とあったものが、改訂版で「言語道断」と改められているという点が注目されるべきであろう。山口による「異同」の中に取り上げられていないということは、それが幸田露伴による意志的な改訂に基づく変化などではなく、単なる印刷上の「誤植」に過ぎなかったとの山口の判断を表しているのかも知れない。この点についてはまた後で触れることになる。なお、右端に【岩新全1版】とあるのは、今日望み得る最上の幸田露伴個人全集となっている岩波書店刊行の『露伴全集』（新版）第1巻所載の「風流佛」を指している。その下に記載された（a）（b）などは、初出版（a）と改訂版（b）の異同が、その版ではどうなっているかを指示するものである。わたしの作業にかかるものであるが、一瞥してわかるように、岩新全1版は、実質（a）（b）の折衷版であり、ある意味では著者の幸田露伴の意向を完全に無視した粗悪な版であると言い得るのではないか。にも拘わらず、露伴最新の網羅的全集であることもあり、折々の「風流佛」の刊本に少なからぬ影響を持つものと考えらる。

また「風流佛」の全刊本テキストを、その系統を考慮して分類する作業を展開することになるが、対応する語句の異同を超えて、段落の切り方や句読点の違いなどにまで目配りした場合、実に様々なヴァリエーションが見いだされる。その点への細やかな配慮を怠らぬように注意すべきであろう。なお、わたしは「風流佛」の刊本計22本の内実を検証すべく、五つのチェックポイント(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)を恣意的に設けた。

【風流佛本文異同】他

(b) はるさめ集本〈改訂版〉	(a) 新著百種本〈初出版〉	【岩新全1版】
粹の父の子實の母の子。(12.2) 10.2	粹の羯羅藍と實の阿羅藍	9.5 (ア) (b)
よその戀 10.6	他の戀 10.1 (イ)	(a)
客もなくよぶ人の。(12.7) 10.7	線香の。10.1	(b)
帯の祝ひ芽出度悦びしが。(13.1) 10.10-11.1	帯の祝ひ芽出度。10.6	(b)
御門出。(13.5) 11.5	御發途。11.1	(a)
日は立ちて。(13.7) 11.7	日は消[ち]て。11.4	(a)
返答さへも力無や。(14.2) 12.2	返答も力無や。12.1	(b)
今も昔わーワット。(17.11) 15.11	今も昔わー引ワット。16.4	(a)
切なき性なるに。(19.5) 17.5	切なき情なるに。18.4	(a)
私の父様は。(21.3) 19.3	坊の父様は。20.8	(b)
大風なる。(21.10) 19.10	鷹風なる。21.6	(b)
七藏其後。(24.7) 22.7	七藏此後。25.2	(b)
酒盃のみ。(25.1) 23.1	盃のみ。25.8	(a)
七めの云ひ掛りしよし。(25.9) 23.9.	云ひ掛[り]しよし 26.8	(b ⁷)
十二分にして。(28.2) 26.2	充分[に]して。29.5-6	(b)
神佛なら。(29.2) 27.2	佛なら。30.7	(b)
猶三百兩。(29.7) 27.7	まだ三百兩。31.3	(b)
言語道断 31.6	言語同断 36.1 (ウ)	(b)
しかと抱き寄て。(34.2) 32.2	緊接(しつかり)抱き寄せて。36.10-11	(b)
見つめる。(34.4) 32.4	見つめらるゝ。37.1	(b)
愍然(あはれ)な。(35.11) 33.11	愍然(かは[わ]いさう)な。39.4	(b)
一分餘り。(36.7) 34.7	一分に足らず。40.2-3	(b)
濁りなく。(36.11) 34.11	濁りなきのみか。40.8	(b)
申し上兼ねます。(38.6) 36.6	申し上げませぬ。42.6	(b)
願はありながら。(39.4) 37.4	願望(ねがひ[い])ありながら。43.7	(a)
拐帯(もちにげ) (40.11) 38.11	拐帯(かどわかし) 45.8	(a)

私の姪を。(41.1) 39.1	姪子を。45.8	(a)
感心して。(45.1) 45.7-8	感心して居るから。53.9	(b)
尊し、尊し。(47.7)	あゝら尊しゝゝ。56.4	(b)
古風の。(49.4)	昔風の。58.6	(b)
着させぬ。(54.1)	着せぬ。63.9	(a)
腕を扼し。(54.11)	肘を擦り。64.11	(b)
樂は分けで。(56.[3-]4)	樂は分けず。66.7-8	(b)
腰元なれば。(58.11)	腰[腕]元だから。70.3	(b)
見せよう。(59.1)	見せましよ。70.4	(b)
行かうよ。(59.2)	行ましよ。70.5	(b)
地ごしらへ。(60.5)	地ならし。71.4	(b)
情交（なか）。(62.10) 63.10	情交（あひ[い]なか）。75.10	(b)
凝れるを。(65.2)	凝[り]しを。77.6	(b)
腹を。(67.4)	お腹を。80.3	(b)
温順の。(67.8)	温順き人。80.9	(a)
作りつれ。(71.7)	作りたれ。85.4	(b)
傍の。(71.8)	傍に。85.6	(a)
手は刀を放さず 77.6	手は刀を離さず 90.5 (エ)	(a)
如く。(77.8) 77.9	如し。90.8	(b)
悪口叩くも。(79.10)	悪口を叩くは。92.10	(b)
又候や修行に行て。(79.10[-80.1])	奈良へ修行に行て。92.11	(b)
新板小説の。(82.5)	新著百種の。96.1 (オ)	(a)
お辰めと。(83.11)	お辰め[お辰め]ゝゝと。98.1	(a)
機會（とたん）に。(95.9)	機會（はづみ）に。113.2	(a)
(ア) : (a) 粹の羯羅藍と實の阿羅藍	(b) 粹の父の子實の母の子	
(イ) : (a) 他の戀	(b) よその戀	
(ウ) : (a) 言語同断	(b) 言語道断	
(エ) : (a) 離さず	(b) 放さず	
(オ) : (a) 新著百種	(b) 新板小説	

『風流佛』東京堂刊「明治文学名著全集」第二篇の校訂者山口剛は、その巻頭の「はしがき」の中で、以下のように言う。

「後年に至つて「春さめ集」の名の下に「一口劍」及び「みれん」と共に合刻再板せられた。作者〔＝幸田露伴：筆者註〕は、それに収録する際、改竄の筆を加へた。本篇はそれを底本とし、巻末に「新著月刊」のそれとの異同を示し

た。もとより、その著しいものにのみとどめた。・・・」（2頁）

これを承けたのであろう、『風流佛 一口劍』（岩波文庫 1927年）巻末の短い「解説」には以下のようにある。

「『風流佛』は著者の出世作で明治廿三年にものせられ、同年九月に「新著月刊」（硯友社機關雑誌）の第五編として刊行された。後年「一口劍」「みれん」と合本して「春さめ集」と名けて再版した際に著者〔＝幸田露伴：筆者註〕は多少改訂された。本書はその改訂されたものによつた。」（100頁）

なお、これらの文には明らかな誤記が存す。「風流佛」の初出本は、「新著月刊」と記載されているが、これは「新著百種」の完全な誤解である。似て非なる叢書名である。また後者には先に指摘した本間久雄氏がおかしたと同じ過ちがある。「風流佛」がものせられたのは「明治廿三年」ではなく「明治廿二年九月」である。

「風流佛」の収録された『露伴全集』（岩波書店・新版）第1巻の蝸牛会による「後記」には以下のようにある。

「○『風流佛』は明治二十二年九月吉岡書籍店発行の新著百種第五號として出、挿繪は松本楓湖・平福穂庵。四十年五月東亞堂書房発行の小説集「はるさめ集」に收められた。大正八年六月天佑社発行の明治傑作叢書第貳篇「風流佛」、十五年九月東京堂発行の明治文學名著全集第二篇山口剛校訂「風流佛」、昭和二年十月岩波文庫の一冊として「風流佛・一口劍」、現代日本文學全集「幸田露伴集」、明治大正文學全集「幸田露伴篇」、及び舊全集所收。又七年五月春陽堂文庫の一冊として出た「五重塔・外二篇」、二十二年十一月東方書局発行の近代日本文學選齋藤茂吉編「幸田露伴集」、二十五年三月角川書店発行の角川文庫の一冊として出た「風流艶魔傳・他五篇」に收められた。本全集は初刊本を用ゐ初出誌・傑作叢書本・現代日本文學全集本・明治大正文學全集本・舊全集を参照し、幸田成友所藏の草稿断片を校合した。」（岩新全1、550頁）

わたしは岩新全1のここに表明された「初刊本を用ゐ」としながらも、種々刊本を参照し、「幸田成友所藏の草稿断片を校合した」という編集方針を問題にしているのである。特に「草稿断片を校合した」の内実が不明である。以下に見る通り、その結果、用ゐた筈の「初刊本」の種々読みが、ほとんど「虚仮にされている」印象が強いのである。

一方、「風流佛」の最新の刊本と言い得る岩波書店刊行「新日本古典文学大系明治編22」『幸田露伴集』の「凡例」には、以下のようにある。

「一 底本はそれぞれ次の通りである。

・・・

『風流佛』『新著百種』第五号（明治二十二年九月二十三日、吉岡書籍店）。

・・・」

シンプルではあるが、初刊本を「底本」としたとあるように、文字通り、「風流佛」は、初出の1889年刊のテキストを復刻することに意義を見いだしているようである。さもなくば、わたしは、著者本人による改訂版を底本とする他ないと考える。この原則を崩した場合には、噴飯もののテキストの濫造が起こると考えられるのである。

以下には「風流佛」の刊本22本を先に指定した五つのチェックポイントによって、その内実を検証したい。(1) から (22) は、刊本22本を、刊行順に並べたものである。(1) は、むろん「風流佛」の初出本（吉岡書籍店1889）である。

「風流佛」の刊本	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)
(1) 『風流仏』吉岡書籍店[18890923]	(a)	(a)	(a)	(a)	(a)
(2) 『妹背貝・風流佛』学館館& [18920128]	(a)	(a)	(a)	(a)	(a)
(3) 『はるさめ集』東亞堂書房 [19070512]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(4) 『風流佛』天祐社 [19190615]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(5) 『風流佛』東京堂 [19260910]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(6) 『風流佛 一口劔』岩文 [19271001]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(7) 改造：『幸田露伴集』 {19271205}	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(8) 春陽：『幸田露伴集』 [19280101]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(9) 岩旧全 1：『露伴全集』 [19301015]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(10) 『五重塔 外二篇』春文 {19320515//1946}	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(11) 『風流艶魔傳 他五篇』角文 [19500305]	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)
(12) 岩新全 1：『露伴全集』 [1952//1978]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(13) 『風流仏・艶魔伝』角文 [19550520]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(14) 『風流佛・對觸體』新文 [19561230]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(15) 講談：『幸田露伴集』 [19630110]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(16) 筑定：『幸田露伴集』 [19671120]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(17) 集英：『幸田露伴・・・集』 [19680312]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(18) 筑明：『幸田露伴集』 [19681125]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(19) 筑現：『幸田露伴集』 [19710825]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(20) 角近：『幸田露伴集』 [19740630]	(b)	(a)	(b)	(a)	(a)
(21) ほる：『日本の文学 3』 [19850201]	(a)	(a)	(a)	(a)	(a)
(22) 岩新日：『幸田露伴集』 [20020724]	(a)	(a)	(a)	(a)	(a)

結局、幸田露伴初期の傑作の一つと考えられている「風流佛」のテキストに関しては、初出の「新著百種第五号」版、その著者による改訂版と言うべき『はるさめ集』版、そして、岩波書店の『露伴全集』（新版）第一巻版の三点であろう。そして、あらゆるテキストに誤植がつきものとしたら、そのそれぞれの版における「誤植の認定」こそが最重要の課題と考えられるが、現在の研究によっては、それが明確に意識的に遂行されているようには思われない。困難な作業ではあるが、名作のテキストを確定する作業には不可欠のものと考えられる。

むすびにかえて：露伴の夢の方へ

わたしは本稿では近代日本の文豪幸田露伴が自分の作品の中に一度ならず残した「言語同断」について論を進めてきた。本来「言語道断」と書くつもりが、うっかりと「言語同断」と書いてしまったのか。それとも露伴にとっては「言語同断」こそが通常の用語法だったのか、結局はわからずじまいである。

「風流佛」に関しては、初出版では「言語同断」とあったのが、改訂版では「言語道断」に変えられている。露伴自身によって加えられた変更なのか、それも必ずしも明確にはならない。改訂に際して、せっかくの機会だから、明らかに誤用であろう「言語同断」を正しく「言語道断」としてしまおうと考えた第三者によるものの可能性も否定できないと思う。初出版と改訂版の異同をチェックし、改訂版を踏襲した東京堂刊行の『風流佛』の校訂者である山口剛によっては、その両者の違いが眼に入らなかったようである。見比べたなら明らかであるが、初出版と改訂版の違いは、著者自身による「言い回し」などについての一種の作家的「推敲」の結果と言うべきものであった。したがって、単なる漢字の違い「言語同断」から「言語道断」への変化自体が、著者露伴自身によってなされたとは考えにくいのではないか。わたし自身は、露伴は「言語同断」を意識して使っていた時期があると考えたい。「風流佛」ほど引き合いに出されることのない他のマイナー作品における「言語同断」は、基本的には変更が加えられぬまま⁽⁷⁾、今も『露伴全集』の中に収録されている。それらは、「風流佛」ほどの傑作でないのだから、「細かいところはそのままにしておけ」という校訂者や編集者の意を反映した結果かもしれない。したがって、初出版には「言語同断」とあった点を確認した上で、露伴の意図はどうあったかに関しては、現段階では、結局未決着である。

だが、幸田露伴の数ある小説作品の中で、「風流佛」の中にただ一度だけ現

れる「夢我夢中」との用語⁽⁸⁾をわたしたちは、看過すべきではない。重要な仏教教理と深く結びついた、いわば仏教用語と言うべき「無我⁽⁹⁾」を含んだ世俗語「無我夢中」、幸田露伴は「無我」を用いることなく「夢我」と書きつけたのである。教養ある編集者ならば、印刷に先立ってそれを正しい用語法の「無我夢中」に訂正しておいてもよかつた筈である。だが運良くか運悪くか、露伴ただ一度のその「夢我夢中」は、「風流佛」発表後130年の間、一度として手をつけられず、「風流佛」のありとあらゆる刊本の中に「夢我夢中」として生き続けてきた事実がある。その用語法のへんてこぶりを、明確に指摘した者は、フランス人の露伴研究者ニコラ・モラル氏をもって嚆矢とする。モラル氏の他にその点を明確に指摘した者を、わたしは知らないのである。氏は短いエッセイ、モラル [2002] の中で以下のように言う。

「珠運がお辰とめぐりあふ夢はこの作の中枢をなし、しかもあまりにも有名な場面であるし、夢と無意識の関係を重ねて強調する必要はなかろうが、露伴がどれ程夢想というテーマに縛られていたかを明らかにする一例を挙げてみよう。風流仏を彫る珠運の姿は「夢我夢中」と形容されている。露伴は「無我」ではなく、「夢我」と書いた。微妙なところではあるが、この表記は初出から全集まで変わらず、単なる誤植とは言いがたいので、夢の必然性をよく語っているのではあるまいか。」(8頁上)

わたしは、こう明確に言い切るモラル氏の主張に賛同する。露伴の小説作品を改めて読んで思うのだが、露伴にとって「夢」が如何に大きなテーマであったことか。わたしは、「無我夢中」という正統的な用字法を十二分に承知の上で、若き幸田露伴は「風流佛」の中で敢えて「夢我夢中」と表記した、と言うモラル氏の見解に全面的に賛同する。そして「露伴の夢」というテーマが浮かび上がるが、それはそれ。今は同音同義語、いや同音異義語としてもいい。「言語道断」と「言語同断」、「無我夢中」と「夢我夢中」、そして、それにもう一つ加えるならば、「一所懸命」と「一生懸命」の組み合わせを指摘しておきたいと思うのである。この三組に関して、わたしが『露伴全集』（新版）の小説編の10巻までを精査した結果でざっと総括するならば、「無我夢中」の用例は皆無、「夢我夢中」の用例はただ一例（「風流佛」）、そして「一所懸命」の用例は皆無、「一生懸命」の用例は（「風流佛」を含む）多数、そして本稿で具体的に見た通り、「言語同断」の用例は多数、終始「言語道断」として確認されるのは、「めぐりあひ」のただ一例だけ、ということになる。この露伴にとつ

ての同音同義語、同音異義語の問題を考える際に、露伴が「漢語の読み」に敏感な詩人氣質の作家であったことに注意すべきであろう。本稿第Ⅰ節冒頭で紹介した本間久雄氏による露伴の紹介文の中の「露伴名は成行、蝸牛庵又は脱天子などゝも号す。」を想起すべきである。露伴の別号と言われる、「蝸牛庵」って何だろう、そして「脱天子」って。たとえば後者「脱天子」は「墮天使」の同音異義語である。また露伴は「蝸牛」にどのような読みを与えることがあったか。若き露伴は、ある漢語を見たらその読みを媒介としてすぐに別の漢語を連想するタイプの詩人だったと言える。ある音を持つ表意文字の漢字による漢語から、同音の別の漢語へと華麗に跳躍する資質を強くもった詩人であったと言えるように思う。いわゆる「異化」という手法／効果に自覚的な文学者として露伴を眺める視点を持ちたいと思う。露伴には自身「書籍の題名、その書の性質により、時代により、作者の趣味によりて、おのづから多様多式なり。中につきてすでに広く世に行はれ、人の持囃すところとなりたるもの名に本づきて、謙下の意を寓し、あるいは俳諧の気味を有たせて題したるものあり⁽¹⁰⁾」と明言する意識的精神が横溢していたと考えられるからである。「風流佛」に関して言えば、本文批評の立場よりすると、「言語同断」「一生懸命」「夢我夢中」を見事に含む、初出版をこそ、第一に尊重する立場を取るべきである。そして、ついで、著者自身による改訂版たる『はるさめ集』所載の「風流佛」を尊重すべきであろう。ただし、その際になされた「言語道断」への改変は著者自身の意図を反映したものか、疑問の余地がある。したがって、それ以後の種々刊本に「底本」を提供したかの観のある岩波の『露伴全集』第一巻所載の「風流佛」は、二つの版を無節操にあるいは恣意的に折衷した「言語道断」のテキストであると断ずる他ない。

最後に本稿は当初、「幸田露伴の夢 (1)」という標題の下で構想されたことを告白しておきたい。モラル氏のエッセイに触発されて、それについて論を膨らませることは、わたしが秘かに狙っていたことではあったが、諸般の制約から不可能となった。露伴の「夢」への夢を告白して、本稿をひとまず閉じようと思う。思いがけず始められた本稿の諸作業を通じて、これまでわたしが露伴に対して抱いてきた敬遠の気持ちが微かに薄れてきたような気がする。今なら露伴にずっと寄り添った形で露伴作品を読むことが出来るような気がしてきたのだ。これもそれも、すべては人生の時間と深く関わっているようにも思えるのである。(了)

- 【略号・参考文献】 幸田露伴 [1867-1947] *「風流佛」の刊本には○印を付す
- 岩新全：[1949-1955//19780518-]：『露伴全集』（第二刷）（42巻）岩波書店
 - 岩旧全：[1929-]：『露伴全集』（旧版）（12巻）岩波書店⁽¹¹⁾
 - 叢書：[19090615-19090927]：『露伴叢書』（前・後編）博文館
 - 改造：[19271205]：『現代日本文学全集 8 幸田露伴集』改造社
 - 春陽：[19280101]：『明治大正文学全集 6 幸田露伴篇』春陽堂
 - 講談：[19630110]：『日本現代文学全集 6 幸田露伴集』講談社
 - 筑定：[19671120]：『定本限定版 現代日本文学全集 7 幸田露伴集』筑摩書房
 - 集英：[19680312]：『日本文学全集 3 幸田露伴・樋口一葉集』集英社
 - 筑明：[19681125]：『明治文学全集25 幸田露伴集』筑摩書房
 - 筑現：[19710825]：『現代日本文学大系 4 幸田露伴集』筑摩書房
 - 角川：[19740630]：『日本近代文学大系 6 幸田露伴集』角川書店 → 岡保生・注釈
 - ほる：[19850201]：『日本の文学 3 五重塔・運命』ほるぷ出版⁽¹²⁾
 - 国書：[19911025]：『日本幻想文学集成 8 幸田露伴』国書刊行会
 - 岩明：[20001215]：『明治の文学 第12巻 幸田露伴』岩波書店
 - 岩新日：[20020724]：『新日本古典文学大系 明治編22 幸田露伴集』岩波書店 → 関谷博・校注
 - 釣り：[19851220]：『露伴の釣り』アテネ書房（開高健編）

< 幸田露伴初刊本 >

- 『風流仏』吉岡書籍店 [1889] 新著百種第五号⁽¹³⁾
- 『葉末集』春陽堂 [1890]
- 『妹背貝・風流佛』学齡館&吉岡書籍店 [1892] 傑作集二
- 『宝の蔵』学齡館 [1892]
- 『尾花集』青木嵩山堂 [1892]
- 『はるさめ集』東亞堂書房 [1907]⁽¹⁴⁾
- 『玉かつら』春陽堂 [1908]
- 『風流佛』天祐社 [1919] 明治傑作叢書第貳篇
- 『幽秘記』改造社 [1925]
- 『風流佛』東京堂 [1926] → 山口剛・語釈
- 『洗心録』修文社 [1928]
- < 幸田露伴作品集（文庫版） >
- 『五重塔』岩波文庫 [1927]
- 『風流佛 一口劔』岩波文庫 [1927]
- 『太郎坊 他三篇』岩波文庫 [1936]
- 『運命』岩波文庫 [1938]
- 『努力論』岩波文庫 [1940]
- 『五重塔 外二篇』春陽堂文庫 [1932//1946]

- 『連環記 他三篇』岩波文庫 [1949]
○『風流艶魔傳 他五篇』角川文庫 [1950]
『天うつ浪』（前・後篇）岩波文庫 [1951a]
『雪たたき 他二篇』角川文庫 [1951b]
『露伴翁座談』角川文庫 [1951c]
『運命 他一編』岩波文庫 [1938//1952]
『風流微塵蔵』（前・後篇） [1952]
『対髑髏 艶魔伝』岩波文庫 [1953a]
『愛』角川文庫 [1953b]
『二日物語・風流魔 他二篇』岩波文庫 [1953c]
『いさなとり』岩波文庫 [1954]
『幻談 他三篇』角川文庫 [1955a]
○『風流仏・艶魔伝』角川文庫 [1955b]
『蒲生氏郷 他二篇』角川文庫 [1955c]
『愛の小説集』新潮文庫 [1955d]
『運命 他十三篇』角川文庫 [1955e]
『五重塔』（改版）岩波文庫 [1956a]
○『風流佛・対髑髏』新潮文庫 [1956b]
『一口剣・ひげ男』新潮文庫 [1957]
『幻談・観画談 他三篇』岩波文庫 [1990]
『連環記 他一篇』岩波文庫 [1991]
『ちくま日本文学全集 027 幸田露伴』筑摩書房 [1992]
『露伴随筆集』（上・下）岩波文庫 [1993]
『一国の首都 他一篇』岩波文庫 [1993]

モラル、ニコラ

[2002]: 「深層の嘆き—『風流仏』と『イマゴ』」『新日本古典文学大系明治編 第22卷 月報 7』

内田魯庵

[1941]: 『明治の作家』筑摩書房

[1994]: 『新編 思い出す人々』（紅野敏郎編）岩波文庫

小田切秀雄

[1973]: 『明治文学史』潮文庫

潟沼誠二

[1989]: 『幸田露伴研究序説 — 初期作品を解説する —』桜楓社
金沢篤

[2012]: 「正宗白鳥の夢(1) — 「ダンテについて」の本文批評を中心に—」『駒澤大学 仏教学部論集』第43号

鹽谷贊・塩谷贊

[1968/1977]: 『幸田露伴』(上・中・下 <1&2>) 中公文庫

鈴木丹士郎

[2008]: 「言語道断」考『専修人文論集』第82巻<鈴木丹士郎教授退職記念号>⁽¹⁵⁾

瀬里廣明

[1971]: 『文明批評家としての露伴』 未来社

[1990]: 『幸田露伴 — 詩と哲学 —』 創言社

[1994]: 「幸田露伴の仏教思想 — 詩と仏教 —」『鹿児島経済大学社会学部論集』 第12巻 4号

本間久雄

[1937]: 『明治文学史』(下巻) 東京堂

正宗白鳥

[1951]: 『作家論』(一・二) 創元文庫

山田俊雄

[1991]: 『ことばの履歴』 岩波新書

【註記】

- (1) この「言語道断」とは、『大智度論』などに「一切諸法・・・・心行處滅言語道断」などの形で散見する仏教用語である。『岩波仏教辞典』(1989)によれば、「あらゆるものの真実のすがた(諸法の実相)は空であって、言語の道が断え、言葉で表現する方法のないこと」(291頁)のように解説される。また、定評ある『中村元 仏教語大辞典』によれば、「言語道断ごんごどうだん 言語を超えていること。道は、口でいうこと。真理ないしは究極の境地は、口(言語)や文字(文章)ではとても表わしえないほど奥深いことをいう。」(429頁)
- (2) 内田魯庵[1941] 378-379頁。内田[1994]には「露伴の出世咄」との標題で収録されている。352-353頁。
- (3) 「翌廿三年九月」は「廿二年九月」の誤り。
- (4) 「山田俊雄著『ことばの履歴』(岩波新書、一九九一年)所収の「言語道断」の項には、「言語道断」が「言語同断」と書かれる事実があったことの指摘とその理由について示唆に富む考究が見られる。」(鈴木[2008]18頁)とあるが、「言語道断」の項は、「言語同断」の項の誤り。
- (5) 「言語道断／言語同断」の現れる「さては邪見な七藏め」で始まるこの部分であるが、そこで段落が改められているものと、そうでないものの二種類がある。初出本は、後者。「・・・さては」で表記されている。
- (6) 『風流佛』の完全な複製本と言うべきものが一度ならず日本近代文学館によって復刻出版されているが、それらはこの22本の中には数えない。オリジナルは国会図書館の近代デジタルライブラリーなどよりPDFの形で利用できるが、実際には、現代のこの復刻本が容易に入手出来るので、今回の作業では重宝した。『風流佛』に限らず、日本近代文学館によって企てられている一連の復刻本は、近代日本の名作読書体験に最大の便宜を与えるものである。
- (7) ただ円本の代表である改造社版『幸田露伴集』の総ルビ編集方針のせいもあってか、そ

ここに収録された他作品の「言語道断」も一律すべて「言語道断」に変更されているとわたしは考えている。

- (8) 「・・・聖書の中へ山水天狗樂書したる兒童が日曜の朝字消護謨に氣あせる如く、周章狼狽一生懸命、刀は手を離れず手は刀を離さず、必死と成て[夢我夢中]、きらめく又は金剛石の燈下に轉ぶ光きらゝゝ、・・・」(岩新全1「風流佛」66頁)第9下
- (9) 露伴は初期作品「艶魔傳」(1891)の中では、「是に據りて考ふれば無我のように見ゆるお釋迦様など申す大聖人は一切衆生禽獸にまで惚れて自分の我慾は自然捨り行きたるかも知らず、大きな戀が大きな人を作つたるにて高が知れたる人間のへぼ思想が聖人とならしめたりとは思はれぬなり。」(岩新全2、52頁)のように、「お釋迦様」との関連で「無我」という用語を用いている。小説作品としては、管見によれば、これが唯一の「無我」の用例と思われる。
- (10) 『露伴隨筆集』(上)「書名の戯れ」161頁。露伴は、そこで「書名」をめぐるものではあるが、同音異義・異字語の実例について語っている。むしろそれは、パロディの精神と呼応するものである。
- (11) 権威ある岩波書店からの『露伴全集』の旧版(12巻)であるが、時間などの制約から、今回は、「風流佛」所収の第1巻しか参照できなかった。
- (12) 「凡例・・・なお本文は、
『尾花集』(明治二十五年十月発行 青木高山堂) — 「五重塔」
『風流仏』(明治二十二年九月発行 吉岡書籍店)
『幽秘記』(大正十四年六月発行、改造社) — 「運命」
を底本とし、各版を参照して明らかな誤植と見なされるもののみ改めた。
・・・(編集部)」(486頁)とあるので、「風流佛」に関しては、一種の初出版の復刻と見なし得る。インターネット上で閲覧できる「青空文庫」の「風流佛」は、このほろぶ社本を底本としている。
- (13) 「風流佛」の諸刊本のうち最も意義深いこの初出本は、「日本近代文学館」によって復刻刊行されている。また「風流佛」の本文批評上重要な東京堂刊行『風流佛』の表紙には、この初出本の表紙が使用されている。本稿は、この「風流佛」の初出本が時間の経過によって、どのように変化増殖を続けたかを検証する作業であるが、小説作品とは、開発者の名前を冠し、開発年・初期設定のある独自の名称を持つ一種の「言語装置」のことだと考える立場よりするならば、誤植・誤記・改変などは、端から問題にする必要などないと言えるかも知れない。1889年幸田露伴によって開発されたユニークな「風流佛」は、どこまでいっても「風流佛」であって、ここが違うあそこが違う、いい加減だ、言語道断だと、あれこれ目くじらなど立てる必要はない、という立場もあり得る。
- (14) この『風流佛』のテキストの考証にとって重要な意味を持つ露伴の作品集『はるさめ集』は、通常、このように平仮名を用いて表記されるが、実際の書物の表紙・扉・目次などでは「波流射梅集」と印刷されている。また、時に『春さめ集』として言及される場合がある。
- (15) 但し、現物未見。わたしは、インターネット上に公開されているPDFファイルより引用している。頁数はPDFの持つもので、もしかしたら現物と齟齬があるかも知れない。その場合には御容赦を乞う。

(本稿は JSPS 科研費 24520406 の助成を受けた研究の成果の一部である)